

薩摩藩英国留学生の旅立ちと長沢鼎の運命について

森 孝 晴

1. 薩摩藩英国留学生派遣プログラムはどこから生まれたか？

そもそも薩摩藩英国留学生のプロジェクト、あるいは派遣プログラムとは何だったのか？ また、この派遣プログラムはどの時点まで続いたと言えるのだろうか？ このプログラム、すなわち海外に学生を送るという計画は、幕府以外でいえば、1863年の長州藩による派遣、いわゆる長州ファイブに続いて日本で2番目の派遣である。つまり日本で最も早い時期に、しかも鎖国中に行なわれたプログラムであったと言える。現在のホームステイプログラムの原型と言ってもいいかもしれない。あるいは、日本でも最も早い時期のツアー旅行でもあったとも言えるかもしれない。

しかも、実は長州藩は若いとはいえ大人を5人送った小規模の留学団であるのに対して、薩摩藩の留学生団は19人と多く、学生だけでも15人に上るうえ、13歳、14歳といった若年者が含まれているのが特徴だ。これは、それぞれの年代で見るとの印象も違い将来の層の厚さも違ってくることを考慮したもので、この点やかけたお金の大きさや参加人数を考えると、薩摩藩の計画は日本初の本格的な留学生プログラムであったと言えよう。

では、薩摩藩英国留学生プロジェクトはどの時点で終了を迎えたと言えるだろう。イギリスに着いたところで終わったのだという意見があるがどうだろう。イギリスに着いた2年後の1867年には多くの学生が帰国しているからこの時点で終わったという考え方もあろうし、アメリカに渡った学生たちのほとんどが帰国した1868年をその年と見ることもできよう。

しかし、長沢鼎はこれ以降もアメリカにいたのであり、帰国しなかった、あるいはできなかったのである。全員が使命を終えて帰国するのを持ってプロジェクトの終了というならば、実は今もこのプロジェクトは終わっていないとさえ言える。あるいは長沢が亡くなった1934年を終了の年とすることも可能だろう。

さて、この薩摩藩の留学計画はどこから生まれたのだろうか。それは、ひと言でいえば名君島津斉彬（1809-1858）の構想だろう。ただし、斉彬が国際的な視野を持っていた原因には彼の曾祖父の島津重豪（1745-1833）の影響があったことも忘れてはならない。斉彬は蘭癖大名として知られる重豪の影響で外国というものに興味を持ったわけで、そのことがほかの同時代人

キーワード：長沢鼎、薩摩藩英国留学生

以上に早く留学生派遣を構想した原因になっていると言ってよい。

斉彬は参勤交代のため江戸にいたことが多かったので幕府に入る海外情報を得ることができた上に、薩摩藩、つまり鹿児島は日本の最南端に位置していたので、琉球も支配下に置いていたためこちらからの情報も豊富であった。黒船の来訪についても浦和沖にやってくるかなり前に斉彬は知っていたそうである。19世紀後半の日本の周辺は、多くの国民は知らなかったが、実は騒然としていた。世界の帝王イギリスは、中国を制圧後の1877年にイギリス領インドが成立してさらに日本をうかがっていた。また、フランスはベトナムを自国領とした後やはり中国・日本へと手を伸ばし始めていた。さらに、ロシアも南下を始め、アメリカはフロンティアの延長線上に日本を目指していた。必ずしもすぐに日本を植民地化しようということではなかったが、日本との通商交渉の先に武力による侵略や植民地化も現実味を帯びていたのである。

このことを考慮した時斉彬は二つの派遣計画を構想した。一つは東へ、もうひとつは西への藩からの派遣であった。東への派遣とは篤姫のお輿入れである。これは留学生派遣構想と表裏一体だったのではないか。公武合体を見据えて幕府を動かそうと考えて篤姫を御台所にして問題の打開を図ったと思われるが、この計画の成功を待っている余裕はないと思い、もう一つの手として西への留学生派遣を構想したものと思われる。

『島津斉彬言行録』には「(斉彬は) 國學館并洋學所御開設ノ御趣意アラセラレ」とか「洋學所の儀は石川碓太郎へ御内命アラセラレ」とあるが、少し離れた所には「弘ク世界ニ交通スベキ時とか「外國ニ乗り出シテ交ル様ニ國威ヲ張ルヲ第一トス・・・此ノ目的ニシテ、學問ヲ弘クシ」などと書かれている。つまり外国に乗り出して交わるために洋学所を作るべきである、というのである。学校を作ろうというのだからもちろん対象は若い学生であろう。ということは、これは若い学生に外国のことを勉強させて外国に送ろうという計画そのものである。

しかし、斉彬はその計画を実施に移す前に亡くなってしまふ。その後実権が弟の久光に移るとこの話はとん挫してしまふ。しかしそこに起こったのが「生麦事件」である。

2. 薩摩藩英国留学生派遣までの経緯

1862年8月、亡き兄斉彬のあとを継いで幕府対応のため江戸を訪れていた島津久光の行列が今の神奈川県が生麦村を通過中のことだった。横浜に着いて間もないイギリス人グループの3人が観光のために馬を走らせている時にこの行列に出くわした。大名行列が通る時にはひれ伏してこれを見送るのが当時の日本人には当然のことだったが、この3人はその辺の事情をよく知らなかった。

馬上の3人が久光の行列に接触したその時、薩摩藩士が飛び出し自源流の腕前を披露して馬上のリチャードソンを切って捨てた。接触は最高に無礼なことだったから、薩摩側としては至

極当然のことだった。リチャードソンは内臓が飛び出した状態で逃走したが、追跡してきた薩摩藩士にとどめを刺された。それは武士の情けとして行なわれた行為だったかもしれないが、これがあとでイギリス側の怒りを増幅したと思われる。

イギリスは案の定激怒して、幕府と薩摩藩に補償と犯人の引き渡しを求めた。幕府はこれに応じたが、薩摩側は当然ながらいわばこれを無視しとほけて予定通り薩摩に戻った。もともと薩摩藩に悪感情を持っていたとは思えないが、さすがにイギリスとしては黙っているわけにはいかないから、翌年の1863年8月に、ユーリアラス号を旗艦とする7隻の軍艦を錦江湾に派遣した。ここで起こった15日から19日までの交渉と衝突を薩英戦争と呼ぶが、もちろんイギリス側の意図は戦争をすることではなかった。

イギリス側としては薩摩を威嚇し補償交渉のテーブルに着かせ、犯人を差し出させることだったが、薩摩側の対応は相変わらずのりくりにだった。このあたりの交渉経過についてはイギリス側で残していた「キューパー提督報告」に詳しいが、両者のやり取りはとても面白い。結局は英側が薩摩の艦船を2隻拿捕したことで薩摩側は宣戦布告と解釈して両者の戦闘が開始された。

島津斉彬はこの日を予想していたかのように生前に錦江湾の各所に砲台を完備していた。つまり少しでも外国勢に対応できる軍備をしなければと考えて、磯の別邸で今は世界産業革命遺産となっている集成館事業を始めて、砲台をはじめとする武器弾薬等を作っていたのだ。この錦江湾の砲台群はなかなか善戦し、イギリスの艦船にそこそこ命中した。しかし、イギリス側は最新鋭の阿姆斯特朗砲を載せていて薩英戦争が初の試射だったらしい。この大砲の威力はすさまじく、薩摩の砲台はことごとく破壊され、^{かんまち}上町地区を中心に街は丸焼けとなった。

しかし、イギリス側も旗艦を中心にかなりの損害を受け、死者も出した。また8月という台風シーズンでもあったため、もとより戦争をして上陸する意図のなかった7隻の艦隊は、とりあえず任務は果たしたということだろうが、撤退していった。この後、薩摩側、少なくとも上層部はことの重大性を感じイギリスの実力を認めて、補償交渉に応じ、速やかにイギリスとの交流を図ることとなるのである。

ここで注目すべきは、薩英戦争後の薩摩藩の動きの速さである。イギリス側に艦船の提供を依頼する一方で、時間をおかずに薩摩藩英国留学生派遣へとひた走るのである。最初の役者は五代様である。のちの五代友厚である五代才助は、当時薩摩藩きっての国際通で坂本龍馬の友人でもあったが、薩英戦争で捕虜になりながらも決死の覚悟で舞い戻り、1864年の春に藩庁にいわゆる「五代才助上申書」を提出するのだ。

この上申書は、イギリスに留学生を送る必要性を説いたものであり、そのための資金調達法にまで触れたものだった。これはまさに、先見的な島津斉彬の構想をよみがえらせたもので、兄のあとを継いで幕政改革や日本の改革に乗り出していた久光をはじめとする藩上層部を突き動かし、なんと6月には、開成所洋学校が開設された。この学校はわずか4年間で造士館に合

併されるが、薩摩藩の教育や人材育成に大きな影響を及ぼした。ここで学んだ学生が留学生としてイギリスに渡りやがて帰国して明治初めの中心的な指導者になっているからだ。

この洋学校は、現在の小川町の「水族館口」電停のすぐ近くにあった。藩校の造士館で優秀だった者が洋学校に入学させられたそうで、開成所洋学校はエリート養成校でもあった。石川確太郎、ジョン万次郎、前島密などそうそうたる教師がいたわけだが、鹿児島で初の英語教師と言われる上野景範が教えたことにも注目すべきだろう。この洋学校の最大の特徴は英学専攻が設置されたことだと思う。

そして、この洋学校の英学専攻に設置と共に長沢は入学したのである。彼はおそらく最年少の学生だったと思われる。同時に長沢の兄貴分でのちに初代文部大臣になる森有礼も入学している。ちなみに、後にイギリスからアメリカに移動する6人の大半は英学専攻出身である。また、薩摩藩英国留学生の多くはこの開成所洋学校の中から選ばれている。初めから選抜を意識した開設であったのかもしれない。

3. 薩摩藩英国留学生の選抜と出発

いわゆる薩摩藩英国留学生とは、15人の学生と4人の使節によって構成された19人の留学生団のことである。その構成は次の通りだ。

	役職・立場	出発時	帰国後（またはアメリカで）の状況
〈使節〉			
新納久脩	大目付	32歳	家老
寺島宗則		32歳	外務卿、「日本電信の父」
五代友厚	留学生団のリーダー	29歳	経済人として大阪で活躍。
大阪商法会議所初代会頭			
堀 孝之	通詞。長崎出身	21歳	通訳。五代の片腕。
〈学生〉			
町田久成	留学生のリーダー	27歳	東京国立博物館初代館長。
「博物館の父」			
畠山義成		22歳	東京開成学校（今の東大）初代校長
名越時成		17歳	戊辰戦争に従軍
村橋久成	加治木島津家の出身	22歳	北海道開拓。
「サッポロビール生みの親」			
朝倉盛明	開成所教師	21歳	鉱山事業を近代化した
鮫島尚信	開成所教師	20歳	初代駐仏公使。

薩摩藩英国留学生の旅立ちと長沢鼎の運命について

松村淳蔵	開成所生	23歳	「日本海軍生みの親」海軍兵学校長
森 有礼	開成所生	17歳	初代文部大臣。初代駐米公使
高見弥一	開成所生。土佐藩出身	21歳	造士館の数学教師。
東郷愛之進	開成所生	23歳	戊辰戦争で戦死。
吉田清成	開成所生	20歳	駐米特命全権公使
長沢 鼎	開成所生	13歳	「カリフォルニアのブドウ王」 アメリカ永住。カリフォルニアワインの開拓者
町田 棟	開成所生	17歳	町田の弟。小松帯刀の養子
財部実行	開成所生	14歳	町田の弟。異人館通訳
中村博愛	医師	22歳	各国公使。仏語通訳

長沢の秀才ぶりを示す逸話はいくつかあるが、13歳の最年少でこの留学生プログラムに選ばれたこともそのひとつである。長沢は出発に際して「造船」を勉強してくるように命じられたが、このことが彼の運命を変えていく始まりだったかもしれない。なぜなら、藩命に忠実だった長沢にとってこれは至上命題だったから、のちになっても藩に命じられた使命を果たしていないという負い目になったと考えられるからだ。

なお、出発に際して薩摩藩英国留学生の一行は全員藩主より変名をもらった。これはまだ鎖国中だったからで、幕府に対して身元を知られないようにという配慮であったとともに、家族に対する配慮でもあったと思われる。面白いのは、メンバーのほとんどが帰国後にこの変名を捨て、本名や新しい名前に変えていることだ。帰国後、あるいは明治維新後に変名を完全な形で本名として使い続けたのは、松村淳蔵と長沢鼎の二人だけである。二人がいかに藩主からもらった名前にこだわったかがわかる。

長沢はのちにこの名で新戸籍を作ってさえいる。彼の忠義心の強さが知れよう。藩命にこたえなければならぬと張り切っている13歳の新人藩士にとって、変名を与えられたということは、単なる藩の都合というよりもっと重い意味があった。長沢は、終生この名に恥じない生き方をしなければならぬという運命を背負ったのである。

なお、朝倉盛明は変名であった朝倉省吾のうち「朝倉」だけをもらって本名としているが、なぜ姓だけにしたのかはわからない。忠義心について松村や長沢に比べて少し割り引かないといけないのかもしれない。それはともかく、上の表にもあるように、一行のメンバーの多くは帰国後明治初めの国造りの時期に大変大きな役割をしている。初代文部大臣として、あるいは海軍の父として、はたまた東大の初代校長として大活躍をしたわけで、この留学生派遣プログラムが成功だったことを首肯させる。

長沢は、鹿児島を発つときも、ロンドンを発ってアバディーンに向かう時も、心を乱されることはなかったという。もちろん今の13歳といっしょにしてはならないが、使命を果たさねば

ならないというまっすぐな気持ちで張りつめていたであろうことはわかる。そして、長沢はそういう気持ちを生涯持ち続けたということは、のちの彼の歩みを見れば理解されるのである。

文献

- 犬塚孝明 (1974, 1981), 『薩摩藩英国留学生』 東京: 中公文庫, 中央公論社.
- 門田明 (1991), 『若き薩摩の群像』 鹿児島: 高城書房.
- 門田明, テリー・ジョーンズ, (1983) 『カリフォルニアの士魂——薩摩留学生・長沢鼎小伝』 東京: 本邦書籍.
- 森孝晴 (2014), 『ジャック・ロンドンと鹿児島』 鹿児島: 高城書房.
- 多胡吉郎 (2012), 『海を越え、地に熟し 長沢鼎 ブドウ王になったラスト・サムライ』 東京: 現代書館.
- 鷺津尺庵 (1933), 『長沢鼎翁伝』: 鹿児島国際大学蔵
- 渡辺正清 (2013), 『評伝 長沢鼎 カリフォルニア・ワインに生きた薩摩の士』 鹿児島: 南日本開発センター.